

地方自治ここにあり 首長インタビュー

先人の思いをつないで、 全国唯一を活かした、笑顔の絶えない村に

北山村 泉 清久 村長



泉清久村長

昨年7月に無投票で泉清久北山村長は初当選されました。県下唯一の村として、筏下りや特産のじゃばらを活用した産業振興、教育、健康づくりの施策を聞きに訪問しました。聞き手は、柳田理事と大前です。

大前：泉村長は県職員から北山村教育長をされて、昨年7月から行政運営をされているのですが、行政を進める中で大事にされていることは。

村長：うちの村は385名の小さな村ですので、田舎の良きコミュニティ、住民同士のつながりを大事にしていきたい。僕は村外出身なので、いろんな祭やイベント事にはできる限り顔を出し、そこでコミュニケーションを取るようになっています。

役場職員も24名なので、一人一人が力を発揮してもらわないと大変です。職員とのコミュニケーションも大事にしています。とにかく、村民に

は笑顔で挨拶、職員に対しては、冗談も含めた声かけです。人は言葉遣いで動いたり動かなかつたりするので、言葉遣いには気をつけてという感じでやっています。

村の人たちには、明るくなつたねとか。いろんなイベントもやり、村長はしょつちゅう顔出してくれるなあとか。まだまだ1年足らずなので、これからだと思っています。

柳田：集落は、幾つもあるのですか。

村長：もともとは5集落でしたが、観光筏が着く一番下流の集落は、人が住まなくなつて、4集落になっています。

一番大きいのが、役場周辺で、次に温泉のところの集落、そして上流に2つ集落があります。集落はすべて国道169号線沿いにあります。山間部では、幹線道路から枝分かれした所に集落があることがあります。北山村は究極のコンパクトシティです。

柳田：地域交通は、三重の方からのバスだけで、新宮行き

はないようですが、コミュニティバスはあるのですか。

村長：村営バスを熊野市駅まで走らせています。それと三重交通が川の対岸を走っている、それも利用できます。

柳田：村営バスはどこへどれくらいの頻度で走るのですか。

村長：朝夕、熊野市まで往復で、それは、熊野市駅のJRの特急に合わせています。村内では、温泉から一番上の集落まで日に2往復走っています。国道沿いに集落があるので、バスも国道を走ればすべて対応できます。熊野川からの奥瀬道路の3期工事が終われば道が良くなります。新宮・本宮方面からの観光客も呼び込みたいので、公共交通をみんなで考えようと検討しています。

全国唯一の観光筏下り

大前：昼食をとった道の駅には、若い人も多かったですが、観光にも力を入れているようですね。

村長：うちで、観光といえば、北山川観光筏下りです。近年、注目を浴びています。昨年は5月から9月の5カ月間で8279人。過去2番目に多か

目次

地方自治ここにあり 首長インタビュー

先人の思いをつないで、
全国唯一を活かした、笑顔の絶えない村に

北山村 泉 清久村長…… 1

和歌山大空襲の惨劇を伝え、

悲惨な歴史を繰り返さないために

元和歌山市立博物館副館長 高橋 克伸さん…… 6

2025年度総会報告 …………… 8

わかやま住民と自治

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号
TEL・FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2025年9月号

2025年8月25日発行 第371号 (月400円)



観光筏下り (北山村観光サイト HP より)

つたです。運行は天候にも左右されますが、昨年は天候に恵まれました。とにかく、もっと知ってもらおうと、都市部でのイベントに参加してPRしています。今年も9回出かける計画です。今日も担当者が行っています。

柳田：どこへ行くのですか。

村長：近畿圏、中部圏で大阪、名古屋が多いですね。たまに

東京にも行くのですが、遠くからだと筏下りだけで来ていただくのは難しい。例えば、新宮のどこかへ来て、筏も一緒に乗るような、コラボしたツアーがいると思っています。

乗客は、今までは50代前後の方が多かったのが、昨年20代が2割と一番多くなり、インバウンドも多くなってきました。都市部でのPR効果もあります。若い人はインスタとかのSNSでどんどん発信してくれそうです。筏下りのインスタのフォロワー数も、去年は1500程だったのが、今は5000を超えてきています。SNSの発信は、効果があると思っています。

今年、筏師さんの処遇改善や経費高騰のため乗船料を1000円アップ(7700円)しました。それで乗船客が減るのではと心配したのですが、全然影響がなくて、昨年以上に予約も入りありがたいです。

600年余り続く筏下りの中で、昨年8月に初めて女性筏師が誕生しました。それがNHKや民放で取り上げられたり、いろんなところから取材申込みがあって、ちよっと話題になっています。

村出資の会社で、 じゃばら振興と村内での 雇用をつくる

大前：(株)じゃばらいず北山は、じゃばら製品の製造販売と、ふるさと納税支援業務をしているようですが、100パーセント村の出資の会社でしょうか、60人程職員さんがいると聞いたのですが。

村長：そうです村の出資で、正職員と契約社員で50数人、パートまで入れると70人程になるかな。

村内のじゃばら加工場の方で20数人。ふるさと納税の受託の関係で、新宮や田辺、広川等のオフィスに職員がいます。県内12市町村の委託を受けてふるさと納税のお手伝いをしています。

大前：経営のノウハウを会社がお持ちなのですか。

村長：そうです。令和2年に会社を立ち上げて6年目になります。社長は、元々役場の職員で、じゃばら振興の担当もしていました。村でじゃばら事業を始めた当初は、毎年何千万円もの赤字でした。今年あかなんだらやめようかとなったときに、彼が通販の楽

天に出店したのです。ちょうど通販のサイトがはやりだった頃で、それが転機になりました。

また、顧客の中で、毎年たくさん買ってくれる人がいて、その理由を聞くと、「花粉症に効果がある」と「そんなことある？」という事で、1000人程のモニター調査で、半分ぐらいの人が、効果があったという回答がありました。それで人気になったという感じです。

大前：じゃばらは村営農園があるのですか。

村長：村全体でじゃばらの収穫量は大体110トン。村の農園というか、北山村が出資している、北山振興(株)が生産しているのが6割ぐらい。それ以外に、個々の農家の方が、組合員30数名で4割ぐらいを作っています。村のじゃばらは、全量(株)じゃばらいず北山が購入して製品に加工しています。

じゃばらの収穫は柚子などと同じ11月で、昨年の買取り価格はキロ340円。キロ単価はいいと思います。その単価も毎年、農家の生産者組合と(株)じゃばらいず北山で、単価の協議がされます。

じゃばら製品の売上げは、昨年で4億5000万円ぐらい。これが過去2番目になります。じゃばらもマスコミとかの露出が多かったので、一昨年よりも4、5千万円上がりました。カゴメさんの「野菜生活100」シリーズに、じゃばらのジュースを作ってもらい、期間限定で全国展開してもらいました。もう一つは、UHA味覚糖の「邪弘のど飴」にうちのじゃばらを使ってもらっています。テレビではNHKの『所さん！事件ですよ』とか、TBSの『がっちりマンデー!!』で取り上げられました。テレビの効果は大きくて、売り上げ増につながりました。カゴメさんや味覚糖さんのような大手企業と取引ができるのは、令和5年11月に新しいじゃばら加工場が出来て、衛生管理の評価を得られたことが大きいです。

もう1つは、今までじゃばら製品のパッケージが、バラバラだったのを、「じゃ」の文字でパッケージを統一しました。そんなこともやっています。

また、原種原木のブランドを強化していこうということで、今年から生産者の調査や



村のじゃばら畑

じゃばらの研究を進めています。それに、花粉症やアレルギーに効くという機能性表示食品の届出をしようと考えています。購入された方が、花粉症に効くとか言ってくれるのはいいのですが、こちらから効果を示すことができるように機能性表示が出来るように、ちゃんと治験もやっています。

大前：国は地方創生で地域商社とかを推進していますが、(株)じゃばらいず北山はその先駆けのような気がしますが、村長：うちの場合、(株)じゃばらいず北山と北山振興(株)と2つの会社があって、外貨を稼いでくる(株)じゃばらいず北山と、観光筏や、村内のプロパン、ごみ、水道の管理、料金徴収というようなことも

含めてやっている北山振興(株)。夏場は筏に乗っているのですが、筏シーズンが終わると、じゃばらの収穫とか、森林組合からの依頼で山に間伐にも行きます。あとは村営バスやスクールバスの運行を担っています。柳田：北山振興(株)に従事されているのは何人ぐらい。村長：今、筏師で16人かな、筏に乗らないバスだけとか、そういう人も含め、大方20人ぐらいかな。そういう意味では、村内での自己完結型というか、村内で仕事を回しています。

「子どもは村の宝物」 子どもに豊かな 体験をさせたい

大前：以前の首長インタビューの時に、幼児の英語教育や外国へ留学に行くという話をされていて、教育や子育てにも力を入れていると思うのですが。

村長：そうですね、「子どもは村の宝物」という合い言葉の中でやっていて、2代前の奥田村長のときから、これからは海外にも目を向け、英語の習得が必要だと、英語教育と異文化の学習に力を入れてきました。保育所の3歳児から、中学校卒業まで、学校の授業とは別に、毎週、英会話教室という塾を放課後、学年に応じてやっていて、15年ぐらい続けています。その集大成として中学校2、3年生が隔年にアメリカへ短期留学に行きます。ちょうど今年の夏休み、アメリカ、サンディエゴとロサンゼルスへ18日間5、6人が行くんですけど、みんなバラバラにホームステイして、午前中は語学学校で勉強、昼からはいろんな活動をして、土日はホストファミリーの方

に観光に連れて行ってもらうとか、今年はドジャースの大谷選手の試合が組み込まれているようです。

それに、最近パソコンとかで字を書く事が減っているから、小学生を対象に毎週水曜日に書道教室を、また、同じく小学生を対象に体操教室を隔週に行っています。

大前：海外短期留学や英語塾、修学旅行も村の費用ですか。

村長：そうですね。うちは小さいからこそこできることです。他にも出産祝い金、入園、入学祝い金。ベビーカーやチャイルドシートの貸出し、乳幼児への絵本配布。それに一番大変な、高校への通学助成を月2万円補助しています。

高校は、新宮の高校か三重県熊野市と御浜町にある熊野青藍高校とかにいきます。三重県側には、バスで通えますが、新宮ではどうしても寮に入ることとなります。寮費も月3、4万円かかり、その内2万円を補助します。それとは別に、育英奨学金ということで、高校生には、月3万円、大学生には月5万円を貸出し、それは返してもらおうのですが、返済は20年間で無利子、そういうこともやっています。

大前：それで、子どもさん達は、村に戻ってこられますか。村長：戻ってくる人と、やっぱり向こうに居着いてしまう人と、まあ、いろいろです。

小さな村でのこぢんまりとした人間関係だけでなく、小学校、中学校の時に、いろんな体験をさせたいということで、それがための海外でもあります。太地町とも交流し、小学5、6年で、白馬のスキーに一緒に行きます。中学生の修学旅行も今まで東京でデイズニールランドでしたが、思い出づくりの修学旅行よりは、この時代なので、平和教育に力を入れたらという事で、前回から沖縄へ修学旅行するようになりました。

そんなことで、外に出て、いろんな体験とか、いろんな人との接触、そういうことを盛んにやっています。

教育とか保育もそうですが、どんどんやり方が進化していることから、それについて行ければと、昨年2月に和歌山大学と協定を結んで、学生さんがこっちへ来ていろんな活動をやって来ています。今年も夏には学童保育に教育学区の学生さんが来てくれたり、筏下りの受付や、じゃばら収



2年前に新設されたじゃばら加工施設

移住や地域おこし協力隊の取り組み

穫に来てくれたりとか。6月13日には、和歌山信愛大学とも協定を結んで、保育園の「誰でも保育」の取り組みや、保育計画へのアドバイスを頂いたりしています。ほかに、京都工芸繊維大学や日本大学からも来てくれるということでも、そういう外からの刺激も受けながら、やっていきたいと思っています。

とにかく「子どもは村の宝物」ということで、その子たちがここでの経験を、都会に居ても、北山村を応援するような気持ちを持ち続けられるようになればと思っています。

柳田：そういう村の取り組みを聞いて、移住して来るというようなケースは。

村長：あると思いますが、ここ数年は移住された方は少ない感じです。移住発信をもうちょっとしなければと思います。

ほかのところがやっているように、家を用意して、誰でもどうぞと言えば、来てくれるかも知れませんが、それはあまり良くないかなと思っています。移住したいという人には、いろんなパターンがあつて、自分勝手に田舎で悠々自適したいから、集落に入ったときに、集落の共同作業、草刈り、道普請、そういう活動に何にも関わらないということになると、コミュニティが壊れるような、そうならないようにし

たいと思っています。

しかし、以前から移住には力を入れて来て、村には公営住宅が4カ所に40軒程あつて、移住者には、定住補助金として、家賃補助も出しています。大前：地域おこし協力隊とか、集落支援員さんとか、地域を支援する制度がありますが。

村長：今、地域おこし協力隊は2人で、1人は観光センターの観光協会で筏下りの事などをやっています。その方がSNSでいろんな発信をしてくれて、それでフォロワー数がバーンと上がりました。そして今年4月から、森林組合に1人入って、山林を活用する全体の整備計画に力を入れてもらっています。森林ゾーニングをして、林業として成り立つような山と、林道から遠いとか、急峻で林業は難しいというような条件のところ、それを採算も含め検討して、経済林と環境林に分けて、それに応じた整備をする。そういうことを航空写真とかレーダーやIoTを使い、また、

県の森林クラウドといういろんなデータが入った資料を活用して進めようとしています。今回の協力隊の方は、大学でもそんな勉強をしていたので、

ITは強いようです。また、役場職員も昨年5人採用しました。皆村外から来て村に住んでくれています。

防災・耐震対策の取り組み

大前：能登地震でも、孤立集落になったということもありましたが、災害の関係での対策は。

村長：災害で道が寸断されたら孤立するだろうと。平成23年の紀伊半島大水害のときも、結構、道が通れなくなりまして。それで2、3年前に村内全戸に、3日分の非常食を配っています。先ほどの話のように、奥瀬道路の3期工事が進んでいます。改修終了に合わせて道の駅周辺を再整備したいと考えています。再整備には防災機能を兼ね備えた。例えば自衛隊が災害復旧にきたらここをベースにしたり、何箇所かバンガローを作って、応急仮設になるようなことを考えています。

北山村は、水害は結構経験しています。大地震は誰も知らない。水害は、台風の予測とか時間的余裕もあるけれど、地震はいつ起こるのかわ

からず心配しています。地域には古い家がいっぱいいて、県の補助などで耐震診断は無料でやれますがその後の改修には、補助金では足りずに高額な費用負担になる。特にお年寄りには、家にお金はかけられんよと言って進まない。能登半島地震でも、家が潰れての圧死、そのあと火事での焼死が見られたので、とにかく圧死を避けたいと思いました。それで、部屋に置く耐震シェルターや耐震ベッドの導入を図っています。40万円を基準として、3分の2まで国・県の補助で、3分の1を村で負担して、村民の持ち出しなしで、40万円までの耐震シェルターや耐震ベッドを住民の皆さんに普及させようと、今年から始めています。

大前：そうですね。

村長：消防団ともいろいろやっています。うちは消防署がなく、緊急のときの救急消防は新宮市に委託をしています。熊野川から来てくれます。それも大地震で道が寸断されるところなるか分からないので、消防団だよりになります。昨年、地区ごとに、避難訓練や防災訓練を、少しずつ進めています。また、女性消防

団も作っています。

大前：そうですか。

村長：女性団員も14、15人になって、3人が防災士の資格を持っています。その方々に各地区での防災訓練のときの講演や説明をしてもらいます。あとは避難所の充実をしよう、ベッドとかパーテーションなどの防災備品を揃えるようにしています。

柳田：家の数はどれくらいですか。

村長：戸数で240戸ぐらいです。

柳田：そしたら240戸にシエルターを全部普及させる。

村長：240戸の中で、さっき言ったように、40戸は村営住宅で、残り200戸として、耐震基準が改正された昭和56年以降の新基準の家も除くと、必要量は減ってはいくち思います。まあ、ただけ手を挙げてくれるかという事でもあります。

財政運営は ふるさと納税の活用と 計画的な施設整備

柳田：さっきからの、子どもに対する施策や、防災施策とか、村の財政との関係では、

どうなのですか。

村長：そこがだんだんしんどくなってきたのも事実です。今年の予算は約20億円。収入20億円の内4億円、5分1をふるさと納税で見込んでいます。

柳田：5分の1ですか。

村長：それがあから、高齢者福祉とか、子育て、教育、村民のためにお金を使えるというのがあります。

大前：人口一人当たりの納税額が全国1位になった時がありましたよね。

村長：そうです、令和4年、かな、9億6千万円で、人口が少ないので全国1位でした。その後、基準の変更などもある、今はそこまではいかなくなっています。

今もどうかこうにか、やっていますけど。やっぱり小さな予算規模なので、ちょっと大きな事業をするとボンと跳ね上がるし、終わったらスツと戻る。僕も県の予算を組む時には、対前年シーリングとか言っていました、うちはそうはなりません。全体でのやりくりとか、計画的な整備とか、一度に幾つもの大きな事業を進められないので、ちよつと平準化をしないとい

けないという感じです。

結構古い公共施設、建物が多く、この役場も昭和41年に建てたものですが、こういう古い施設を、改修なのか、建て替えるのか、計画的に整備していくことにしています。

診療所と役場、 社協が協力して 予防医療・健康づくり

柳田：医療関係は。

村長：国保の北山診療所が1つありまして、そこには医師が常勤しています。大きい病気が増えています。大きな病気が増えるとなると、新宮市の医療センターや三重県御浜町の紀南病院に行くことになります。とにかく、うちは病気になるように、予防医療に力を入れていて、がん検診とか、いろんな検診も自己負担なしでやっています。

大前：健康づくりの何かポイント制をしているとか聞いたのですが。

村長：検診を受けたら何ポイントとか、歩いたら何ポイントとか。「歩け歩け」というのを、この辺の方言では「あいべあいべ」と言うので、「あいべあいべポイント」ということで、月にどれだけ歩

いたとか、検診を受けた、シニアのエクササイズへ行ったら何ポイントとかあって、それでポイントを増やせる。それが一定の基準までくると、村で使える商品券を頂ける。健康増進の取り組みです。

住民が385人ほどなので、診療所の先生は、みんなの顔が見えています。この人は何の持病で、どの薬を飲んでいるのか、大部分分かることから顔の見える予防医療に力を入れています。

大前：診療所の先生は確保できているのですか。なかなか僻地医療は大変だと聞くのですが。

村長：以前は和医大からの派遣だったのですが、今はうちで独自に雇っています。それも何年間という契約で来てくれて、その先生が頑張っています。

診療所の治療だけではなく、保健師や看護師と一緒に訪問診療や指導にも行ってくれるし、診療所の隣に社協があって、そこには生活支援ハウスがあり、常時8人から10人のお年寄りが生活しています。それも全部合わせて、診療所の医師、看護師、リハビリの先生、保健師、役場住民福祉

課、社協職員が2週間に1回カンファレンスをやって、患者や住民の情報共有をするようにしています。

大前：これからの施策や村長の思いはどうですか。

村長：そうですね、先ほど言ったように、とにかく小さな小さな村ですけど、賑わいのある、いつも笑顔の絶えない村でいたいと思います。賑わいを作るためには、いろんな仕掛けも必要だと思います。今も頑張っていますが、もっと村に来てくれる施策や、移住や、関係人口ということも必要です。全国唯一の飛び地で、唯一の筏下り、原産のじゃばら、その3つを大事にしながら、やっていきたいと思っています。

ここまで、何代にもわたって、存続してきた先人の思いを引き継いでやっていかなあかんと、みんなにもよく言っています。人口減少に、どれだけ立ち向かえるかを考えながらやっていきたいと思っています。

大前：お忙しい中、長時間、ありがとうございました。

和歌山大空襲の惨劇を伝え、 悲惨な歴史を繰り返さないために

元和歌山市立博物館副館長 高橋 克伸 さん



高橋克伸さん

和歌山大空襲から80年、当時の惨劇を目にされた方は、年々少なくなってきました。被災者の体験を語る会を開催したり、体験者の証言を記録する活動を行っている高橋さんにお話を聞きました。

高橋：6月21日、ビック愛で「戦後80年 体験者が語る和歌山大空襲」という集まりをしました。戦災80年で、和歌山大空襲の被災者の方に話をしていただけだと考えたのです。年齢の事もあり難しいと思っていました。3人の女性が話してくれとなり実現しました。

事前に、30人ぐらい来てくれればと、倍の60人の部屋をとりました。当日は112人も来られてびっくりしたのです。それは、戦後80年という節目でもあるし、世界もロシアのウクライナ侵攻や中東など、きな臭い状況になってきているので、戦争を振り返る

タイミングと合って、来てくれたのだと思いました。

以前ある市内の中学校で和歌山大空襲の話をさせてもらった時は、その学校は平和教育に熱心でしたが、和歌山大空襲があったのを初めて知ったという生徒さんもいて、私らにとっては当たり前のことですが、世代間の違いが大きいという感じはしました。

1945年7月9日 和歌山大空襲の惨劇

大前：空襲で汀公園付近で、たくさんお亡くなりになったのは、なぜなのでしょう。

高橋：そこも色々聞いているのですが、今の市役所の西、商工会議所と国土交通省の間で、県庁が昭和13年に現在の小松原通りに移転して、広い空き地になっていたのです。本町とか小野町の周辺とかは結構家屋が密集して、人がたくさん住んでいました。町内会でも避難場所として決めていたところもあったようです。



汀公園の戦災殉難者供養塔

体験者の方は、当時小学生ぐらいなので、細かな事や分からない事も多いのですが、大きな防空壕があったとか、両方に出入口のあるドーム状の防空壕がいくつもあったようです。

和歌山市には10回空襲があるのですが、7月9日の空襲は7回目で焼夷弾を中心としたものでした。それまでの空襲は、爆弾でドーンと大きな穴を開ける。対象は建物という事で、焼夷弾とは性格が違いました。それで、防空壕に逃げれば

助かるだろうと考えていた。ただ体験者の何人かに聞くと、逃げた頃には、汀公園は人であふれていた。だからたくさんの方がそこへ集合したのです。

大前：そういう広い場所、燃えるものがあまりないのに、どうしてでしょう。

高橋：これは火事の独特な、あの関東大震災と同じだと思うのです。周りが燃えていてそこだけ残って、渦巻きのようになっていくという、火炎地獄とか言いますけど、そういう状況になってしまった。

和歌山市立博物館 ホール展（令和7年7月8日～8月17日）

戦後80年 和歌山大空襲の記憶

今から80年前、昭和20年（1945年）7月9日の深夜から翌未明にかけてアメリカ軍のB29爆撃機108機が和歌山市上空に飛来し、約800トンもの焼夷弾が落とされました。市街地の大半は焼け野原となり、1,100人以上の尊い命が奪われました。

博物館では、平成27年（2015年）度から和歌山市の空襲を体験した方の記憶を後世に伝え残そうと、体験談を記録する活動を行い、平成29年度から随時、体験談をパネルにして掲示してきました。今回は、これまでいただいた方々のパネルを一堂に掲示させていただきます。

体験談で多く語られる言葉は、地獄、熱い、恐怖、悲惨、残酷、逃げるのに必死、遺体を見ても何も感じない、運が良かった、運命、九死に一生を得た、終戦でほっとした、などです。まさに生と死が目前に迫って、体験した人しか話せない貴重な言葉です。また体験者は、現代の私たちに「戦争はむごい」、「戦争を二度とてはいけぬ」、「若い人にこの出来事を体験させたくない」、「平和がほしい」などと話されます。

博物館では、悲惨な歴史を繰り返さないためにも、戦争の記録・記憶を伝えていきたいと思っています。また、あわせて当時の時代背景を知っていただく一助とするため、関係資料をパネル・実物展示します。



【写真】商工会議所から北東を撮影。画面中央やや右の建物が旧丸正百貨店

※和歌山市の空襲は、昭和20年1月9日から7月30日まで、計10回が記録されています。このうち7月9日の空襲が大規模であったことから、この日の空襲を「和歌山大空襲」と呼んでいます。

和歌山市立博物館「戦後80年和歌山大空襲の記憶」

高橋：これをやり始めたのは、10年前の2015年からで、ちょうど戦後70年という節目の年です。私も60歳で退職の

大前：和歌山大空襲の証言記録をとり始めたのは、どんなきっかけで。

被災者等の生の声を記録に残す

高橋：汀公園で748名が犠牲になり、その後市内で亡くなった方を改葬して1000人ぐらい集めたところ、石碑に書いています。体験談を聞くと、ここの辺に埋葬していたというのもありました。亡くなられた人数は正確には分からないのです。行政が報告した数字で一番少ないのが1101人です。だから1100人以上という言い方をしています。

高橋：汀公園で748名が犠牲になり、その後市内で亡くなった方を改葬して1000人ぐらい集めたところ、石碑に書いています。体験談を聞くと、ここの辺に埋葬していたというのもありました。亡くなられた人数は正確には分からないのです。行政が報告した数字で一番少ないのが1101人です。だから1100人以上という言い方をしています。

大前：1100名とか1400名とかがお亡くなりになったと慰霊塔の碑文に書いていました。

高橋：現時点で170名、出すにあたって、本人から内容確認と顔写真の承諾を得ています。中には自分が亡くなつてからと言われる方もいます。記録は、音声録音して文字起こしで文章にして要約文も作ります。出来るだけ客観的な感じで要約して300字以内にまとめて、パネル展示す

高橋：現時点で170名、出すにあたって、本人から内容確認と顔写真の承諾を得ています。中には自分が亡くなつてからと言われる方もいます。記録は、音声録音して文字起こしで文章にして要約文も作ります。出来るだけ客観的な感じで要約して300字以内にまとめて、パネル展示す

大前：和歌山市立博物館のパネル展示で、和歌山大空襲の証言が展示されていました。あれが、収集されたものなのですね。

和歌山市ができて一番不幸で大きな出来事が戦災で、今生きている方々の証言を声で残せるのは、博物館という歴史を残す施設の仕事であり、役割です。

年で5年間は再任用で勤務しましたが、管理職から外れ少し時間がとれるようになった。私は、江戸時代の城や医学の歴史が専門ですが、それをやりつつ、戦後70年で、空襲の体験者の方がまだいらつしやる。その人たちの証言をICレコーダーに納めて記録して残していく、それで後世に伝えることができればとやり始めました。今は、退職してボランティアで続けています。

米軍の報告でも6千メートルぐらいまで火柱が立ち上がったと書いています。また、戦後50年に博物館で作った映画でも、毛見の方で見ていた女性が、掌の指紋さえ見える明るさで火が上がっていたと証言しています。

体験した当時の小学生が、防空壕が危ないと外に出たら、かぶった夏布団が、熱くなつて煙が出てきて、ゴロゴロと風で転がされて、何かに引

混ざったゲル状の燃焼物が入っていて、前に信管があり後ろに風の尾ひれ状のものがついていて、それが1つの爆弾に約35個入っています。B29が高度3000メートルぐらいで爆弾を落とし、1500メートル位でベルトが外れてバラバラとなり、尾ひれに火がついたまま焼夷弾が落ちてくるのです。その時、焼夷弾は燃えてなくて、地面にボンと落ちると信管が働き

るようにしました。

大前：証言される方は、かなりご高齢の方ですね。

高橋：一番年配の方は大正12年生まれ、今年102歳ですね。一番若い方で昭和20年、この前の集会で話していただいた方で、赤ちゃんの時の体験です。その方は、焼夷弾でのやけどを隠してきたというお話でした。

次の世代への継承を 何とかしたい

大前：本当に貴重な記録で、当時0歳の方も80歳ですから。
高橋：ご協力いただける方は皆さん元気です。恐怖の記憶というのは残るんですね。若い時の記憶も残ります。結構色々な話をしていただけです。
大前：証言者の方はどうやって探すのですか。

高橋：博物館では毎年7月9日頃に、和歌山空襲の映画と、空襲体験者が昭和21年に描いた絵巻物を上映する行事を行っています。そういう行事の時に協力くださいと呼びかけたのがスタートで、証言をしてくれた人から次の人へと、友達の友達ということ

す。

大前：こうした貴重な資料と平和の大切さを次の世代に伝えて行きたいですね。

高橋：以前は、夏休みなどに、中学や高校生が、いろんな平和の取り組みをしていたと思うのですが、学校現場のことは分からないですが、そういう

う取り組みが最近はないように思えます。

資料を集めるのは、私が頑張ればなんとかできるのですが、問題は継承するということができない。今のところ壁に当たっています。

とにかく中学校や高校の時、こういうことをやったという

記憶だけでも残れば、いつかどこかで芽が出ると思うのです。私は昭和29年生まれで、

この世代の後の昭和30年代生まれの人や、あるいはリタイヤされた方で、ちよつと故郷のことを知りたい。こういう活動に参加してもらえの方がいいなと思っています。

2025年度総会報告

6月14日(土) 和歌山市勤労者総合センターで開催した総会には、22名の会員が参加。江原太郎氏(自治労連公営企業評議会議長)に「水道事業の現状とこれから」として記念講演を行っていただきました。

総会は、藤沢理事の司会で、大泉理事長の挨拶で始まり、議長は伊藤一三氏にお願いしました。

昨年は、「橋本市まちづくり研究会」の学校統廃合の取り組み、和歌山市での「住民自治をすすめる会」との懇談などに取り組み、今年の方針では、引き続きブロック交流会の開催と地方自治の担い手を育てる取り組みを重視する方針が了承されました。常務理事・事務局役員の交

代はありませんでした。

地域住民が 水道をどう守るかを 考える事が重要

記念講演で、水道事業は憲法25条の生存権を具現化した、

清浄、豊富、廉価な水の供給を目的とした水道法に基づき運営されていますが、近年の水道法は、民営化を推進する改正が行われ、広域化と合わせて事業委託が進められています。

大阪では、橋下徹知事就任後、大阪府と大阪市の水道事業統合が計画されましたが、

大阪市以外の市町村の反発により、最終的には大阪広域水道企業団が成立しました。

浜松市では、市民の反対運動により水道事業の民営化は凍結されましたが、包括委託は進められています。

全国的に水道管の老朽化は進み、水道を支える技術者不足は深刻です。また、人口減少により財政的にも厳しくなっていく傾向にあります。能登半島地震では、配管に加えて浄水場の崩壊により復旧に時間がかかった。南海トラフ地震では、和歌山県下全体で約3500カ所の漏水が予測されています。

水道料金の値上げは住民にとっても痛みを伴うが、老朽化した管の交換や施設更新には費用が必要であり、災害に強いまちづくりにもさけて通れない課題でもあります。

しかし今進められている広域化・統合は、人材確保につながらず、料金値上げも反対運動になりにくく容易に行われています。

地域ごとの水道事業体を地域住民がどう守るか自らの問題としてとらえる事が重要だと話されました。



2025年総会の様子